

# A児の成長から気づいたこと

～ 一人ひとりのニーズに応じたよりよい支援をするために ～

いしばし学園池田市立石橋小学校 下山 智子

## 1. はじめに

平成 19 年に改正学校教育法が施行され、特別支援教育が法的に位置づけられてから 9 年がたちます。「障害者基本法」の改正や「障害者権利条約」が批准され、学校現場では、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築が求められています。支援学級に在籍する子どもの数は年々増加し、本校においても肢体不自由学級、病弱虚弱学級、知的障がい学級、自閉情緒障がい学級があわせて 7 学級あります。医療的ケアの必要な重度重複の障がいをもつ子どもから、対人関係に課題がある子ども、学習に課題を抱える子どもと子どもたちの発達課題もそれぞれ違い多様化しています。その中で、私は支援学級担任として、『ていねいな関わり』ということに特にこだわって日々子どもたちに関わってきました。

「障害者差別解消法」が本年 4 月より施行され、障がいのある子どもに対し、その状況に応じた「合理的配慮」の提供と合理的配慮の基礎となる環境の整備について、以前にもまして語られるようになりました。子どもたち一人ひとりに合った支援をしていくためには、子どもたちが何を求めているのか、先を見据えてどうすればその子が自立への道を進むことができるか、きめ細かくゆっくりていねいに関わることで見えてきます。そして見えてきた課題に対してどのような手立てをするか、合理的配慮は何か考える必要があります。また子どもたちにとって学校が安心できる場、分かる、楽しく学べる場であることが絶対的に重要です。「合理的配慮」と「基礎的環境整備」、つまり個別の配慮と全体に対する配慮がうまく合わさって、子どもたちにとってベストな支援が成立すると考えます。

ここでは、私が初めて支援学級担任になったときに出会った A 児とのかかわりの中で「合理的配慮」とは何か、「基礎的環境整備」とは何か考えていきたいと思います。

## 2. A児の入学当時の様子

小学校の入学式では、ドキドキワクワクした子どもたちの笑顔、そして我が子をあたたかく見守る保護者の姿をよく見ることができます。ただ、中には「大丈夫かな」「学校とはどんな所なんだろう」と心配と不安の方が大きい子どもと保護者もいます。障がいのある子どもの中には、初めてのこと、見通しの持てないことに対して過度に不安を感じたり、慣れるまでに時間がかかったりする子どももいます。A 児もその一人でした。そのため A 児とその保護者は大きな心配と不安を抱えて入学式当日を迎えました。入学式は保護者も一緒ということもあり、無事一日を終えることができましたが、次の日から A 児にとっては不安なことの毎日でした。

1 年生の 1 学期は学校に慣れる、クラスに慣れることを第一義においているため、A 児は教育活動の殆どを通常学級（交流学級）で行っていました。

A 児は不安なことを「イヤ」という言葉で表現していました。登校後母親と別れるときに「イヤ」と泣き、常に不安な表情で教室に入ってから何か活動をするたびに「イヤ」と訴えたり、ときには泣き叫んだりすることもありました。椅子に座っていること、プリントを提出すること、名前を書くこと、

体操服に着替えること、給食も掃除も、友だちと手をつなぐこともイヤ・・・等々。学校生活で取り組むことのほとんどが「イヤ」なことばかりでした。

### 3. 通常学級で過ごす中で

#### (1) A児への入り込み指導

学級担任の一斉指示は理解できないことが多く、常に、私が個別に声かけをする必要がありました。ですが、視覚的な情報(実物、絵、文字、モデルなど)を取り入れ、実際に私が一緒に動くことでどうすればよいのか伝えたり、難易度や量を調整し「ここまでやってみよう」と活動内容を伝えて見通しを持たせたりすると取り組むことができる課題もありました。

常にA児に寄り添ってゆっくり分かりやすく話をすること、活動内容を事前に端的に伝えること、A児の思いをゆっくりと聞くことが安心感にもつながり「イヤ」だけど「やってみよう」という気持ちになることに、A児とじっくり関わる中で見えてきました。

もともと真面目な性格で、「やらなければならないことは分かっているができない、やり方が分からない、だからイヤ。」という思いが強かったA児でしたので、見通しが持てること、できたこと、褒めてもらえたことが増えるにつれて「イヤ」と言うことも少なくなり表情も和らいでいきました。そして、1つの活動に対してこちらが声かけや手助けする頻度も少しずつ減らしたり、ときには見守ってみたりと支援の仕方も少しずつA児の様子を見ながら変えていきました。ただ、A児が困ったときや新たな課題が見つかった場合にはすぐに対応できるようには心がけていました。

#### (2) 安心できるクラスづくり

A児は学校生活に慣れるとともに、周りの友だちを見ながら行動する姿も少しずつ見ることができるようになり、友だちと同じことをしたいという思いも出てきました。それは大変すばらしいことなのですが、ここでA児を焦らせたのが「友だちと同じスピードでできない」ということでした。手先の不器用さ、また読み書きの面でも課題があり、書くことに人一倍時間がかかります。拡大教科書を使用したり書く量を調整したりするものの、誰か一人でも一番に「できました」という声があがると、まだ自分は書けていない、できていないということに非常に焦ります。給食、着替え、帰る用意など他の課題に取り組む中でも、いろいろな所に気が取られるうちに何をすべきか忘れてしまい、私に声をかけられて我に返り、「待ってください!」「まだできてない!」と教室で叫ぶこともありました。

A児のクラスでは、A児が困っている様子を見ることで、「どうしたのかな?」「手伝ってあげよう」「～したらいいよ」と優しく関わってくれる子が多くいました。そして子どもたちは教師がどのようにA児に関わっているかよく見ています。A児の学級担任は経験豊富なこともあり、指示が明確で分かりやすく、またA児の課題もよく理解してくれていました。一つの課題に対しどこまで取り組むとよいか伝え、不安そうにしているときには声をかけて気持ちをほぐし、焦っているときには必ず「待ってますよ」とA児が課題をやり遂げるのを確認してから次の指示を出すようにしてくれていました。低学年の子どもたちにとって大変影響力のある担任がA児を気にかけている、大切にしているという姿は、クラスの子どもたちにとっても非常に大きかったことと思います。周りの教師や友だちが待っていてくれること、指示やクラスのルールも明確であったことがA児にとって安心感につながり、焦ることも減ってきました。A児も1学期の終わり頃には周りに意識を向けることができるようになり、友だちと遊んだり、一

人で取り組むことも増えてりと興味関心が広がり、落ち着いて過ごすことができるようになってきました。

### (3) 分かりやすい授業づくり

A児の学級担任の授業は本当に分かりやすく、また面白い授業でした。私自身も低学年の担任になったときこのように指導したらよいのだと教師として参考にさせていただきたいぐらい、子どもを引きつけ、学力も身につけさせていく指導でした。授業中、机の上に置くもの、発表の仕方、話の聞き方、ノート書き方などのルールも明確で分かりやすく、ぶれることはありません。誰か一人でも違うことをしていると「どちらが正しいの？」とA児は困惑してしまうところですが、クラスみんながそのルールをもとに学習しています。それはA児にとって安心して学習できる環境でした。たくさんの友だちがお手本となってくれます。そのような授業の中ですからA児も「勉強するときはこうするもんなんだ」「こうしたらいいんだ」と理解し、学級担任を目で追うようになってきました。発問や友だちの発表に対し一生懸命考え、学力も身につけてきました。「できる、分かる」ということは自信につながり、おしゃべり好きな面もあって授業中の発表がA児の楽しみの一つになりました。もちろん、発表の内容は言葉だけでは分かりにくく、間違っていることも多々あります。ですが、間違っても決して教師から間違っているとは言いません。もう一度尋ね、考えさせ気づかせる、またはA児の言葉の足りないところを補ったり、話の文脈を探ったりしながら周りの友だちに分かりやすいように言葉を付け加えて「～ということだね」と確認して正解に導くということをしてくれました。A児が間違いや失敗に大変抵抗を示し、泣いてパニックになることがあるということを理解してくれた上での対応です。また、具体物や半具体物を使った学習も大変理解しやすい授業でした。

現在A児は中学年になっています。1年生のときの学習の仕方が定着し、今でもその学習の仕方で落ち着いて学習に取り組んでいます。

## 4. 支援学級での取り組み

### (1) 小集団での指導

本校では今年度も支援学級で自立の活動(たけのこタイム)を週に5回行っています。感覚統合やムーブメントを取り入れたうごき、ソーシャルスキルトレーニングを養うための活動など、一人ひとりの課題を少しでも改善・克服できるように活動内容を工夫しています。子どもたちの障がいに応じ、PT、OTなどによるセラピーも個別に実施しています。

<たけのこタイムの時間割>

	月	火	水	木	金
1		感覚運動	SST	ムーブメント	感覚運動
2	音楽療法 年間4回		PT	SST	
3				OT	
4					
5					
6					

S S T



感覚運動

A児も入学してすぐに自立の活動に参加しました。自分のからだを思うようにコントロールすることが苦手、また常に不安感があり自信がないA児は、始めは意欲的に取り組んでいるという様子ではありませんでした。しかし毎回ほぼ同じ内容で、その中で難しすぎず簡単すぎないほどよい挑戦を必要とする活動、周りの友だちが楽しみながら取り組んでいる活動はA児にとっても自発的に「やりたい」と思うことにつながり、成功感や達成感を味わうことができる場となっていきました。

特に、感覚情報がからだにたくさん入る感覚統合やムーブメントの考え方を取り入れたうごきの活動は、運動会でのダンスにも生かされました。ダンスはまずお手本となる教師を見て運動の模倣をしなければいけません。運動の模倣をするには、人のからだの動きと自分のからだの動きを照らし合わせ、自分のからだのうごきを頭の中でイメージして動きながら手足も別々の動きをする必要があります。入学始めのA児の様子から、ダンスを覚えいろいろなうごきをしながら人前で踊るということはかなり難しいことのように感じていました。しかし、いざ運動会練習でダンスを踊ったとき、お手本の先生を見て多少ギクシャクしながらもからだを動かしているA児に私は驚きました。何よりも「イヤ」と言うこともなく「かんたん!」「できたよ」「先生、見ててな」と自信満々の表情で言うA児の言葉に驚かされるとともにとてもうれしく、運動会当日も音楽に合わせて友だちと踊るA児に成長を感じ、私自身が感動した一日となりました。保護者もA児がダンスを踊っている様子に驚いたそうです。

感覚統合やムーブメントの考え方を取り入れたうごきでは、指示を聞いて頭でイメージしながら実際にからだを動かすこと、友だちがどのようにからだを動かしているかよく見ること、いくつかの違った課題をタイミングよく協調させる活動などに取り組んでいます。その活動がA児にとって運動会でのダンスを抵抗なく自信を持って取り組めたことにつながったと感じ、「予想以上によくできていた運動会です」と喜んでいた保護者にそのことを伝えました。

## (2) 個別指導

A児が3年生になってから、国語と算数の個別指導を始めました。得意なことは自信につなげることができるように、苦手な学習課題を「できた」「またやってみよう」と思うことができるように、児童の様子を見ながら取り組んでいきました。また、以下の点を配慮しました。

- ・1時間の授業の流れをホワイトボードに書く。  
(ある程度パターン化した活動内容にする。)
- ・指示は具体的に分かりやすく伝える。
- ・視覚的に示すことができる教材・教具、電子黒板を使用する。
- ・「聞くとき」「話すとき」「書くとき」を区別し、同時に提示しない。
- ・マス目黒板を利用したり、ノートの書き始めの場所をあらかじめ記入したりし、書く量も調整する。
- ・国語の学習では単元によりルビ打ち、分ち書きもされた拡大教科書を使用する。
- ・テストのときでも、内容によっては問題の読み上げをする。
- ・問題を解き、「できた」「分かった」という成功体験を授業の最後に持つようにする。
- ・終わりのチャイムが鳴ったら授業は終わる、延長はしない。

以上の配慮を行うことで、A児は通常学級で学習するときよりずいぶん落ち着いて、また集中して学

習に取り組めていました。また、個別授業をする中で、初めてのことで抵抗なく取り組むこと、間違いや失敗を受け入れること、自分の思いを頭の中で整理し文章で表すことなど、A児の課題だったり苦手だったりしたことが少しずつではあるものの改善されてきているように感じています。

## 5. 保護者との連携

A児が日々学校で落ち着いて過ごすことができるようになってきたのは保護者の協力、手助けももちろんありました。A児と時間割を合わすとき、次の日のスケジュールを作成して一緒に確認し、授業ごとに必要なものを一目でよく分かり持ち運びしやすいようにケースに小分けにして入れてくれていました。体育で鉄棒やなわとびをしているときは家でも練習するなどA児が見通しを持つことができるように、学校で困らないように、不安なく取り組めるようにいろいろな手立てをうってつけていました。

学校に送り迎えを毎日していたこともあり、私と保護者でその日のA児の様子や、これからの学習や行事にどのように取り組むか伝え相談したり、こちらから家庭で取り組んでほしいことをお願いしたりすることもありました。反対に、A児の課題を理解し、学校から帰宅してからの様子を見ているからこそ、学校に対して「～のようにしてほしい」とお願いされることもありましたが、「では、～してみましょう」「次は1つステップアップして、～まで取り組んでみましょう」と学校と保護者がA児のより良い支援について考える機会ともなり、それはA児の発達、成長を育むには必要なことであり、私自身、保護者と相談する中で学んだこともたくさんありました。

教師だけでなく、もちろん保護者も子どもの発達を理解することが一番大切です。理解し、どのように子どもに関わっていくかによって子どもの成長が変わってきます。毎日接している親だから分かる子どもの変化、成長が分かります。A児の保護者も子どもの小さな変化を見逃さず、何かにつまずいているときにはアドバイスをしたり、学校に連絡をしたりしてくれ共に支援方法を考え、A児に成功体験を積み重ねていく、そして「できてうれしい」という体験が「やってみよう」という自信になり、それがA児の確かな発達、成長につながっていったと思います。

## 6. おわりに

A児の成長からも感じられるように、子どもが自信をもって自分から行動できるように、将来自立した生活を送ることができるようにするために、保護者や教師、周囲の人が相談・連携し合いながら、その子のニーズに応じたよりよい支援を整えていく必要があります。

A児にとっては指示の明確化や伝え方の工夫、活動の見通しを立てること、拡大教科書やノートのマスを大きくするなど読み書きに対する配慮、座席の位置、活動量の調整、褒めて自信を持たせること、そして支援学級での自立の活動での取り組みなどが「合理的配慮」に当たると考えます。また、多くの時間を過ごす通常学級が拡大教科書等を安心して使用できる場であったこと、分かる、楽しく学べる場であったことなどがA児の成長には大きく影響しています。

授業はすべての子どもたちにとって、分かる、できる、楽しい授業であることが求められます。「視覚化」「構造化」「言語化」の視点を生かした授業を創意工夫することで、支援を必要とする子どもたちだけではなくすべての子どもたちにとって「わかる、できる、楽しい」授業になります。そういった環境の中でこそ、子どもたちが互いを分かり合い、高め合える学級、子どもたちが自分に自信を持ち、自分を大切にできること、そして子どもと子どもをつないでいくことができる、つまり誰もが安心して

過ごせる場となっていくます。このような「学級づくり」が「合理的配慮」を行う上で大切な「基礎的環境整備」であると思います。そのことを通常学級担任も常に意識して日々の学級づくり、授業づくりに取り組んでいくことが必要ではないかと思ひます。

学校は、通常学級担任、支援学級担任、その他の教師など学校全体のチームで子どもを理解し、連携し合いながらすべての子どもたちが安心して生き生きと学校生活を送ることができるように、何よりも子どもの持っている力を最大限引き出してあげられるような『ていねいな関わり』を連続して続けていかなければなりません。そのためにも、子どもの「やった!」「できた!」「楽しい!」を育むことができる取り組み、一歩一歩力をつけながら段階を踏んで発達、成長へとつなげることができる取り組み、そして子どもたち一人ひとりがお互いに尊重し合い、個性を認め合い、他人への思いやりの心を育める取り組みが通常学級、支援学級にかかわらず学校全体で広がっていくことを強く願ひます。

## 7. 参考文献

- (1) 辻井正次(2007)「特別支援教育ではじまる楽しい学校生活の創り方」河出書房新社
- (2) [監修] 土田玲子 [編集] 石井孝弘+岡本武己「子どもの理解と援助のために感覚統合Q&A」  
共同医書出版社
- (3) 高橋登(編著)「障害児の発達と学校の役割～地域で学び、育つということ～」ミネルヴァ書房
- (4) 「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」について ～「ともに学び、ともに育つ」  
学校づくりをめざして ～大阪府教育委員会(2015)研修会資料